



Migration Toolkit for Applications 5.1

Web コンソールガイド

Migration Toolkit for Applications Web コンソールを使用して解析のためにアプリケーションをプロジェクトにグループ化

Migration Toolkit for Applications 5.1 Web コンソールガイド

Migration Toolkit for Applications Web コンソールを使用して解析のためにアプリケーションをプロジェクトにグループ化

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2021 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Web_Console_Guide.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

This guide describes how to use the Migration Toolkit for Applications web console to simplify migration or modernization of Java applications.

目次

多様性を受け入れるオープンソースの強化	3
第1章 はじめに	4
1.1. WEB コンソールガイドについて	4
1.2. MIGRATION TOOLKIT FOR APPLICATIONS の概要	4
Migration Toolkit for Applications とは	4
Migration Toolkit for Applications で移行を単純化する方法	4
詳細情報	4
1.3. WEB コンソールについて	4
第2章 WEB コンソールのインストール	5
2.1. LINUX、WINDOWS、または MACOS への WEB コンソールのインストール	5
2.2. OPENSIFT CONTAINER PLATFORM への WEB コンソールのインストール	6
2.2.1. OpenShift Container Platform 4.6 以降への Web コンソールのインストール	6
2.2.2. OpenShift Container Platform 4.2-4.5 への Web コンソールのインストール	7
2.2.3. OpenShift での Web コンソールインストールのトラブルシューティング	9
2.2.3.1. OpenShift コンソールを使用したログのダウンロード	9
2.2.3.2. CLI を使用したログのダウンロード	9
2.2.3.3. No route to host エラー	10
2.2.3.4. 不十分なリソース	10
2.2.3.5. 問題の報告	11
第3章 WEB コンソールでのアプリケーションの分析	12
3.1. プロジェクトの作成	12
3.2. 保存した分析の実行	14
3.3. 解析結果の表示	14
3.4. レポートの確認	16
3.5. 分析設定の更新	16
3.6. グローバルカスタムルールの追加	17
3.7. グローバルカスタムラベルの追加	17
第4章 WEB コンソールの認証設定	19
4.1. WEB コンソールの認証の有効化	19
4.2. 管理ユーザーの認証情報の変更	19
4.3. デフォルトの WEB コンソールユーザーの削除	20
4.4. WEB コンソールユーザーの追加	21

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[弊社](#) の CTO、Chris Wright の [メッセージ](#) を参照してください。

第1章 はじめに

1.1. WEB コンソールガイドについて

Java アプリケーションやその他のコンポーネントを移行またはモダナイゼーションするために、Migration Toolkit for Applications (MTA) を使用するエンジニア、コンサルタント、およびその他のユーザーを対象としています。ここでは、Web コンソールを使用して移行やモダナイゼーションプロジェクトを管理し、アプリケーションを解析する方法を説明します。

1.2. MIGRATION TOOLKIT FOR APPLICATIONS の概要

Migration Toolkit for Applications とは

Migration Toolkit for Applications(MTA)は、Java アプリケーションの移行とモダライゼーションを簡素化する拡張可能かつカスタマイズ可能なルールベースのツールです。

MTA は、プロジェクトソースディレクトリーやアプリケーションアーカイブを含むアプリケーションアーティファクトを検査し、変更を必要とするエリアを強調表示する HTML レポートを作成します。MTA は、以下の例を含む多くの移行パスをサポートします。

- エンタープライズアプリケーションサーバーから Red Hat JBoss Enterprise Application Platform への移行
- アプリケーションをコンテナ化してクラウド対応の状態にする
- Spring Boot から Quarkus への移行
- OpenJDK バージョンの更新

ユースケースおよび移行パスの詳細は、[開発者 Web ページの MTA](#) を参照してください。

Migration Toolkit for Applications で移行を単純化する方法

Migration Toolkit for Applications は一般的なリソースを検索し、アプリケーションの移行時に問題のあるスポットを検索します。これは、アプリケーションによって使用される技術の概要ビューを提供します。

MTA は、移行またはモダライゼーションパスを評価する詳細なレポートを生成します。このレポートは、大規模なプロジェクトに必要な作業の見積もりを予測して、関係する作業を軽減するのに役立ちます。

詳細情報

Migration Toolkit for Applications の機能、サポートされる構成、システム要件、利用可能なツールの詳細は、[『Migration Toolkit for Applications の概要』](#)を参照してください。

1.3. WEB コンソールについて

Migration Toolkit for Applications の Web コンソールを使用すると、ユーザーのチームは多数のアプリケーションに対する移行およびモダライゼーションの作業を評価および優先順位付けできます。これにより、分析のためにアプリケーションをプロジェクトにグループ化し、結果を強調表示する多数のレポートを提供します。

第2章 WEB コンソールのインストール

Web コンソールは、Linux、Windows、macOS、または OpenShift Container Platform にインストールできます。

2.1. LINUX、WINDOWS、または MACOS への WEB コンソールのインストール

Linux、Windows、または macOS のオペレーティングシステムに Web コンソールをインストールし、ブラウザで Web コンソールにアクセスできます。

Web コンソールは Chrome および Firefox でテストされています。

前提条件

- OpenJDK 1.8、OpenJDK 11、Oracle JDK 1.8、または Oracle JDK 11
- 8 GB RAM
- macOS にインストールする場合は、**maxproc** の値は **2048** 以上である必要があります。

手順

1. [MTA Download ページ](#) に移動して、Web コンソールの **Local install & OpenShift** ファイルをダウンロードします。
2. **.zip** ファイルを任意のディレクトリーに展開します。



注記

Windows オペレーティングシステムにインストールする場合は、以下を行います。

1. **.zip** ファイルを **mta** という名前のディレクトリーに展開し、**Path too long** エラーを回避します。
2. 抽出中に **Confirm file replace** ウィンドウが表示されている場合は、**Yes to all** をクリックします。

インストールディレクトリーは、本ガイドでは **<MTA_HOME>** と呼ばれます。

3. Web コンソールを起動します。

- Linux オペレーティングシステム:

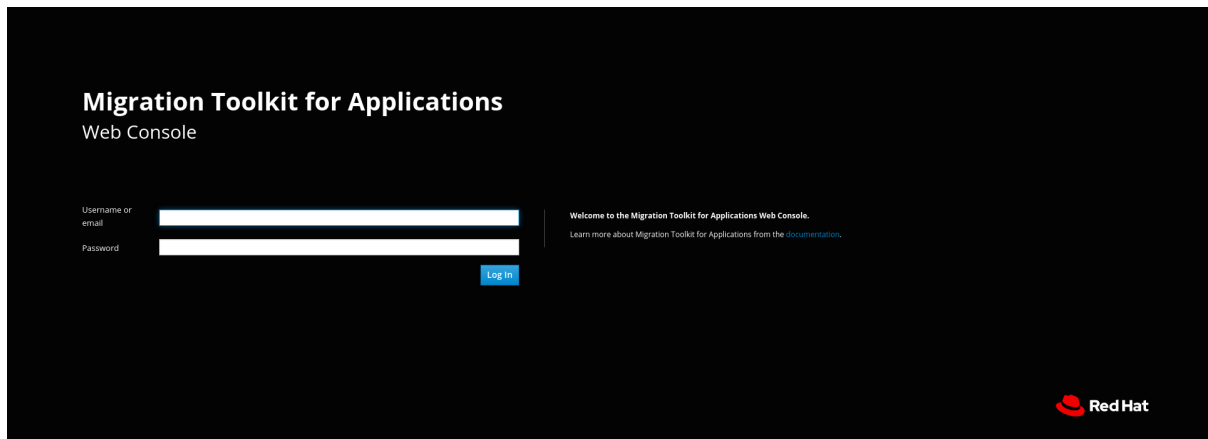
```
$ <MTA_HOME>/run_mta.sh
```

- Windows オペレーティングシステム:

```
C:\<MTA_HOME>\run_mta.bat
```

4. ブラウザーを開いて **http://localhost:8080/mta-web** に移動します。Web コンソールのログインページが表示されます。

図2.1 Web コンソールのログインページ



デフォルトのユーザーは **mta** で、デフォルトのパスワードは **password** です。

2.2. OPENSIFT CONTAINER PLATFORM への WEB コンソールのインストール

Web コンソールは、Migration Toolkit for Applications Operator を使用して OpenShift Container Platform 4.6 以降のバージョンにインストールできます。

テンプレートをインポートしてインスタンス化することで、Web コンソールを OpenShift Container Platform 4.2-4.5 に Web コンソールをインストールして、Web コンソールアプリケーションを作成できます。

2.2.1. OpenShift Container Platform 4.6 以降への Web コンソールのインストール

Web コンソールは、Migration Toolkit for Applications Operator を使用して OpenShift Container Platform 4.6 以降のバージョンにインストールできます。



注記

Migration Toolkit for Applications Operator は Community Operator です。Red Hat は、Community Operators のサポートを提供しません。

前提条件

- 4 つ vCPU、8 GB RAM、および 40 GB の永続ストレージ。
- Web コンソールをインストールすることができるプロジェクト1つまたは複数。



重要

デフォルトのプロジェクトに Web コンソールをインストールしないでください。

- Migration Toolkit for Applications Operator をインストールするための **cluster-admin** 権限。
- プロジェクトに Web コンソールアプリケーションをインストールするための **project-admin-user** 権限。

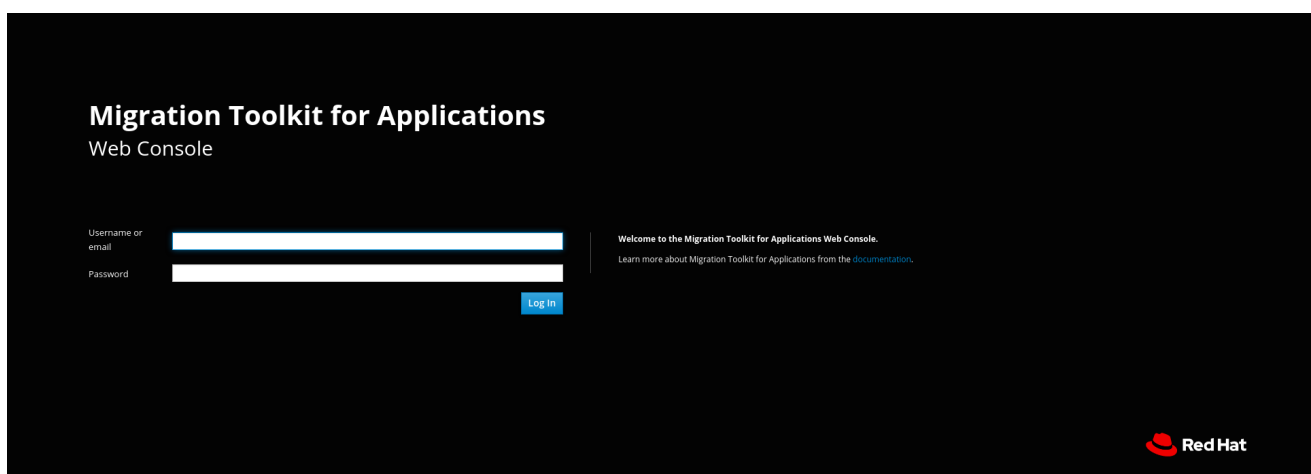
Migration Toolkit for Applications Operator のインストール

1. **cluster-admin** 権限を持つユーザーとして OpenShift Web コンソールにログインします。
2. **Operators** → **OperatorHub** をクリックします。
3. **Search by keyword** フィールドを使用して **Migration Toolkit for ApplicationsOperator** を見つけます。
4. **Install** をクリックします。
5. **Installed Namespace** の一覧からプロジェクトを選択し、**Install** をクリックします。
6. **Operators** → **Installed Operators** をクリックし、Operator がインストールされていることを確認します。

Web コンソールアプリケーションのインストール

1. **project-admin-user** 権限を持つユーザーとして OpenShift Web コンソールにログインします。
2. **Developer** パースペクティブに切り替え、**+Add** をクリックします。
3. **Add** ビューで **Operator Backed** をクリックします。
4. **Migration Toolkit for ApplicationsOperator** をクリックします。
5. **Create** をクリックします。
6. アプリケーション設定を確認し、**Create** をクリックします。
7. **Topology** ビューで **mta-web-console** アプリケーションをクリックし、**Resources** タブをクリックします。
8. **secure-mta-web-console** ルートをクリックし、新しいブラウザウィンドウで Web コンソールを開きます。
9. ユーザー名 **mta** とパスワード **パスワード** を入力し、**Log in** をクリックします。

図2.2 Web コンソールのログインページ

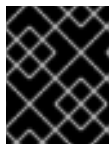


2.2.2. OpenShift Container Platform 4.2-4.5 への Web コンソールのインストール

テンプレートをインポートしてインスタンス化することで、Web コンソールを OpenShift Container Platform 4.2-4.5 に Web コンソールをインストールして、Web コンソールアプリケーションを作成できます。

前提条件

- 4 つ vCPU、8 GB RAM、および 40 GB の永続ストレージ。
- Web コンソールをインストールすることができるプロジェクト1つまたは複数。



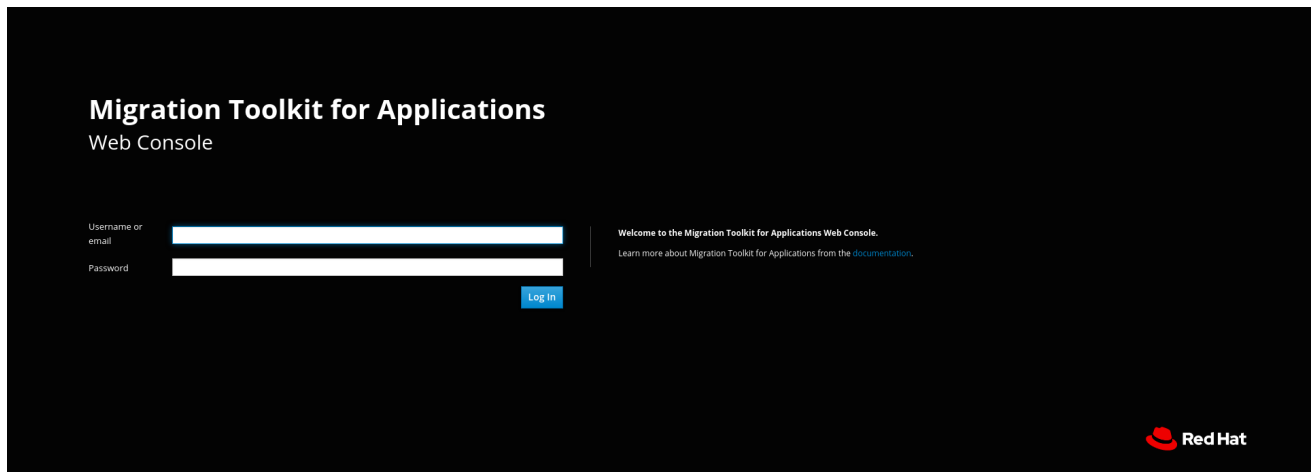
重要

デフォルトのプロジェクトに Web コンソールをインストールしないでください。

手順

1. [MTA Download ページ](#) に移動して、Web コンソールの **Local install & OpenShift** ファイルをダウンロードします。
2. **.zip** ファイルを任意のディレクトリー (**MTA_HOME**) に展開します。
3. OpenShift Web コンソールを起動します。
4. Web コンソールの右上隅にある **Import YAML** をクリックします。
5. **Project** 一覧から **mta** を選択します。
6. **MTA_HOME/openshift/templates/** ディレクトリーから **Import YAML** フィールドに適切なテンプレートの内容をコピーします。
共有ストレージ用のテンプレートと、共有ストレージのないテンプレート2つが提供されます。
7. **Create** をクリックします。
8. **Developer** パースペクティブに切り替え、**+Add** をクリックします。
9. **Add** ビューで **From Catalog** をクリックします。
10. **Migration Toolkit for Applications** テンプレートをクリックします。
11. **Instantiate Template** をクリックします。
12. アプリケーション設定を確認し、**Create** をクリックします。
13. **Topology** ビューで **mta-web-console** アプリケーションをクリックし、**Resources** タブをクリックします。
14. **secure-mta-web-console** ルートをクリックし、新しいブラウザーウィンドウで Web コンソールを開きます。
15. ユーザー名 **mta** とパスワード **パスワード** を入力し、**Log in** をクリックします。

図2.3 Web コンソールのログインページ



2.2.3. OpenShift での Web コンソールインストールのトラブルシューティング

このセクションでは、OpenShift Container Platform での Web コンソールインストールのトラブルシューティング方法について説明します。

2.2.3.1. OpenShift コンソールを使用したログのダウンロード

OpenShift コンソールを使用して Pod ログをダウンロードできます。

手順

1. OpenShift コンソールを開き、**Applications** → **Pods** に移動します。
2. **mta-web-console** Pod をクリックします。
3. **Logs** をクリックします。
4. **Download** をクリックしてログをダウンロードし、保存します。

2.2.3.2. CLI を使用したログのダウンロード

CLI を使用して Pod ログをダウンロードできます。

手順

1. Pod 名を取得します。

```
$ oc get pods -n <project-name>
```

出力は以下のようになります。

```
NAME                READY   STATUS    RESTARTS   AGE
eap-builder-1-build  0/1    Completed 0          1d
mta-postgresql-1-hfbdn 1/1    Running   0          1d
mta-sso-1-build      0/1    Completed 0          1d
mta-web-console-1-build 0/1    Completed 0          1d
mta-web-console-1-vt7s5 1/1    Running   1          1d
sso-1-wjl2n         1/1    Running   1          1d
```

2. **oc logs** を使用して Pod のログを検査します。

```
$ oc logs <pod>
```



注記

出力をリダイレクトし、現在のログのコピーを取得できます。

```
$ oc logs <pod> > ./<pod>.log
```

2.2.3.3. No route to host エラー

mta-web-console-executor ログの **No route to host** エラーは、**mta-web-console-executor** Pod が **mta-web-console** Pod に接続できないことを示します。

```
13:44:03,501 SEVERE [org.jboss.windup.web.messaging.executor.ExecutorBootstrap] (main) Could not start messaging listener due to: Failed to connect to any server. Servers tried: [http-remoting://192.0.2.4:8080 (java.net.NoRouteToHostException: No route to host)]; javax.naming.CommunicationException: Failed to connect to any server. Servers tried: [http-remoting://192.0.2.4:8080 (java.net.NoRouteToHostException: No route to host)]
```

このエラーは、**mta-web-console-executor** が **mta-web-console** Pod の前に実行を開始するため発生します。

mta-web-consol pod が数分にわたり実行された後で、**mta-web-console-executor** ログを確認します。

2.2.3.4. 不十分なリソース

以下の条件は不十分なリソースを示しています。

- **mta-web-console** Pod は実行されておらず、以下のエラーが OpenShift コンソールの **Pod Details** 画面の **Events** タブに表示されます。

```
0/9 nodes are available: 4 Insufficient cpu, 4 MatchNodeSelector, 9 Insufficient memory.
```

- **mta-web-console-deploy**、**mta-web-console-executor-deploy**、および **mta-web-console-postgresql-deploy** Pod がタイムアウトし、以下のエラーがログに表示されます。

```
error: update acceptor rejected mta-web-console-executor-1: Pods for rc 'mta/mta-web-console-executor-1' took longer than 600 seconds to become available
```

これらの問題を解決するには、以下を行います。

1. **cluster capacity** ツールをインストールし、実行して、**スケジュール可能な Pod** 数を判別します。
2. 以下のアクションのいずれかを実行して、クラスターリソースの負荷を変更します。
 - **プロジェクトの制限範囲または リソースクォータを増やします。**
 - **プロジェクトの要求されたリソースを減らします。** Web コンソールには、4 vCPU および 8 GB の RAM が必要です。

- 実行するジョブの数を減らします。
3. Web コンソールを再デプロイします。

2.2.3.5. 問題の報告

MTA は、問題追跡システムとして Jira を使用します。MTA の実行に問題がある場合は、[Jira の課題を送信します](#)。

第3章 WEB コンソールでのアプリケーションの分析

Web コンソールでプロジェクトを作成して、アプリケーションを分析できます。

各プロジェクトは、特定の分析用にアプリケーションをグループ化し、カスタムルールおよびラベルで設定できます。

分析プロセスは、移行またはモダナイゼーションのためのアプリケーションの準備ができていることを示すレポートを生成します。

3.1. プロジェクトの作成








Create project ウィザードを使用して、Web コンソールでプロジェクトを作成できます。

手順

1. Web コンソールで、**Projects** をクリックします。
2. **Create project** をクリックします。
3. プロジェクトの一意的な名前、オプションの説明を入力し、**Next** をクリックします。
4. アプリケーションをアップロードするには、**Upload** タブをクリックし、**Browse** をクリックして、アップロードするアプリケーションファイルを選択し、**Close** をクリックします。
アプリケーションをアップロードすると、MTA サーバーに直接保存されます。
5. サーバパスを登録するには、**Server path** タブをクリックし、フィールドにアプリケーションの **Server 側のパス** を入力します。
アプリケーションのサーバパスを登録すると、MTA は常に最新バージョンを使用するようにします。
6. **Next** をクリックします。
7. 1つ以上の変換ターゲットをクリックします。

Select transformation target

Select one or more targets by clicking on the icons below.

 <p>Application server migration to eap6</p> <p>Upgrade to the latest Release of JBoss EAP or migrate your applications to JBoss EAP from competitors' Enterprise Application Server (e.g. Oracle WebLogic Server).</p>	 <p>Containerization</p> <p>A comprehensive set of cloud and container readiness rules to assess applications for suitability for deployment on OpenShift Container Platform.</p>	 <p>Linux</p> <p>Ensure there are no Microsoft Windows paths hard coded into your applications.</p>	 <p>OpenJDK</p> <p>Rules to support the migration to OpenJDK from OracleJDK.</p>
 <p>Camel</p> <p>A comprehensive set of rules for migration from Apache Camel 2 to Apache Camel 3.</p>	 <p>Quarkus</p> <p>Rules to support the migration of Spring Boot applications to Quarkus.</p>	 <p>Spring Boot on Red Hat Runtimes</p> <p>A set of rules for assessing the compatibility of applications against the versions of Spring Boot libraries supported by Red Hat Runtimes.</p>	

8. **次へ** をクリックします。

9. パッケージを選択し、フィルター>をクリックして分析に追加します。
10. **Next** をクリックします。
11. カスタムルールを追加する場合は、**Add rule** をクリックします。
詳細は『[ルール開発ガイド](#)』を参照してください。
 - ルールセットファイルをアップロードするには、**Upload** タブをクリックし、**Browse** をクリックして、1つ以上のファイルを選択してから **Close** をクリックします。
ruleset ファイルには、**.mta.xml** または **.windup.xml** 拡張子が必要です。アップロードしたファイルは MTA サーバーに保存されます。
 - ruleset ファイルのサーバーパスを登録するには、**Server path** タブをクリックし、**Rules** パスを入力して **Save** をクリックします。
サーバーパスを登録すると、MTA サーバーは常に最新バージョンの ruleset ファイルを使用します。
12. **Next** をクリックします。
13. カスタムラベルを追加するには、**Add label** をクリックします。
 - labelset ファイルをアップロードするには、**Upload** タブをクリックし、**Browse** をクリックして、1つ以上のファイルを選択してから **Close** をクリックします。
labelset ファイルには、**.mta.label.xml** または **.windup.label.xml** 拡張子が必要です。アップロードしたファイルは MTA サーバーに保存されます。
 - サーバーパスを登録するには、**Server path** タブをクリックし、フィールドにラベルファイルの **Labels** パスを入力して、**Save** をクリックします。
サーバーパスを登録すると、MTA サーバーは常に最新バージョンの labelset ファイルを使用するようになります。
14. **Next** をクリックします。
15. 以下の **高度なオプション** を確認し、必要な変更を加えます。
 - **Target**
 - **Source**
 - **Exclude tags**: これらのタグを持つルールは処理されません。
 - **Additional classpath**: 逆コンパイルまたはその他の分析で使用できるように、追加の **.jar** ファイルまたはディレクトリーのスペース区切りリストを入力します。
 - **Application name**
 - **Mavenize group ID**
 - **Ignore path**: 分析から除外するファイルのパスを入力します。
 - **Export CSV**: レポートデータを CSV ファイルとしてエクスポートします。
 - **Disable Tattletale**: 各アプリケーションの Tattletale レポートの生成を無効にします。
 - **Class Not Found analysis** クラスパスで利用できない Java ファイルの分析を有効にします。分析に一部のクラスが利用できない場合は、このオプションを使用しないでください。

- **Compatible Files report:** 大規模なアプリケーションの場合、Compatible Files レポートの生成に時間がかかる場合があります。
- **Exploded app:** 入力ディレクトリーには、アプリケーションのパッケージ化されていないソースファイルが含まれます。
- **Keep work dirs:** デバッグ目的でグラフデータベースや抽出したアーカイブファイルなどの一時ファイルを保持します。
- **Skip report:** HTML レポートは生成されません。 **Export CSV** を有効にしている場合には有効にする必要があります。
- **Allow network access:** このオプションにより、パフォーマンスが低減します。
- **Mavenize:** アプリケーションの構造および内容に基づいて Maven プロジェクトディレクトリー構造を作成します。
- **Source mode:** アプリケーションファイルは、コンパイルしたバイナリーではなく raw ソースファイルです。

16. **Next** をクリックします。

17. プロジェクトを確認し、**Save** または **Save and run** をクリックします。
プロジェクトが **Projects** 画面に表示されます。

3.2. 保存した分析の実行

保存された分析を実行できます。

手順

1. Web コンソールで、**Analysis results** をクリックします。
2. プロジェクトを選択します。
3. **Run analysis** を実行します。

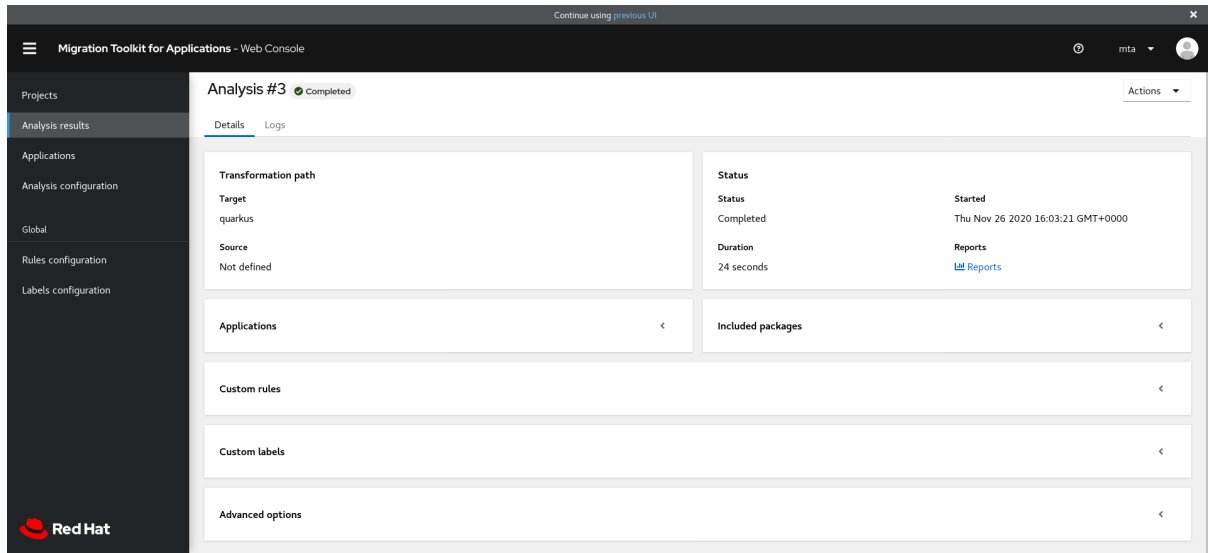
進捗バーには、分析の進捗が表示されます。

3.3. 解析結果の表示

すべての分析の結果は、**Analysis results** 画面のプロジェクトでグループ化され、一覧表示されます。

手順

1. Web コンソールで、**Analysis results** をクリックします。



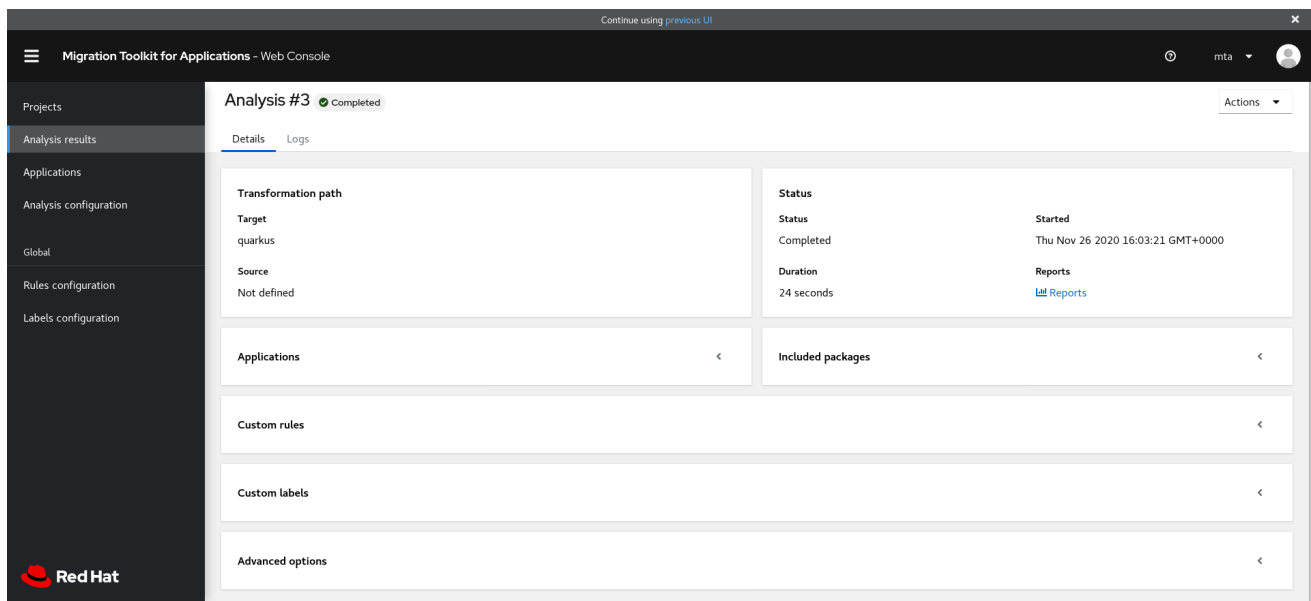
2. 一覧からプロジェクトを選択します。

3. 確認する分析の数をクリックします。

結果が **Results** 画面に表示されます。これには、**Details** と **Logs** の2つのタブが含まれます。

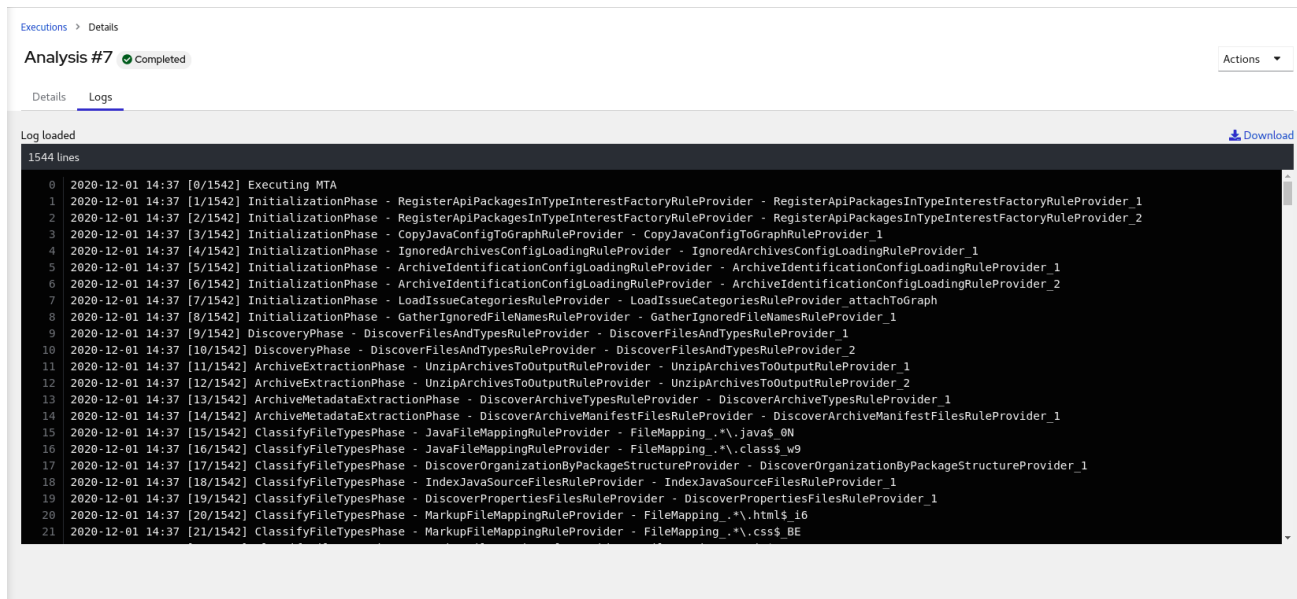
Details タブには、ステータス、開始日、期間、設定など、分析に関する重要な情報を表示します。

図3.1 分析の詳細画面



Logs タブには、分析中に生成されるログが表示されます。

図3.2 ログの分析画面




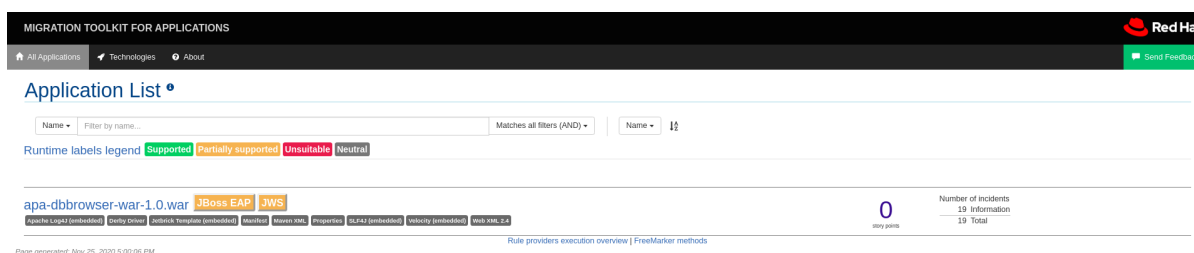
3.4. レポートの確認

MTA Web コンソールは、アプリケーションに変更を加えなければならないかどうかを決定するのに役立つ詳細なレポートを提供します。これらのレポートは、**Analysis results** からアクセスできます。

レポートは、『CLI ガイド』の「[MTA レポート](#)」で詳細に説明されています。

手順

1. Web コンソールで、**Analysis results** をクリックします。
2. 調査する分析の横にある **Reports** アイコン  をクリックします。レポートの **All applications** 画面が表示されます。

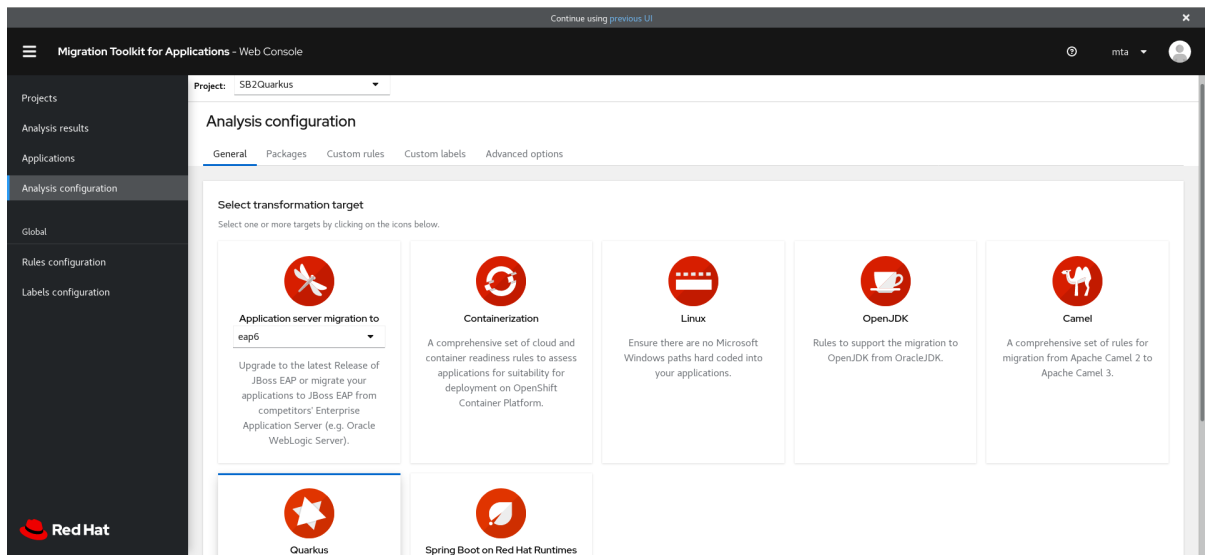


3.5. 分析設定の更新

異なる変換ターゲット、高度なオプション、またはカスタムルールなどを使用して、分析設定を更新できます。その後、プロジェクトで更新された分析を実行できます。

手順

1. Web コンソールで、**Analysis configuration** をクリックします。



2. **Project** を選択します。
3. 適切なタブをクリックして変更を行います。
4. **Save** または **Save and run** をクリックします。
プロジェクトが **Projects** 画面に表示されます。

3.6. グローバルカスタムルールの追加

MTA には、全プロジェクトに適用される事前設定されたグローバルルールのセットが含まれています。

独自のカスタムグローバルルールを定義できます。

カスタム MTA ルールの作成に関する詳細は、MTA の [『ルール開発ガイド』](#) を参照してください。

手順

1. web コンソールで、**Rules configuration** をクリックします。
2. **Add rules** をクリックします。
3. ルールセットファイルをアップロードするには、**Upload** タブをクリックし、**Browse** をクリックして、1つ以上のファイルを選択してから **Close** をクリックします。
ruleset ファイルには、**.mta.xml** または **.windup.xml** 拡張子が必要です。アップロードしたファイルは MTA サーバーに保存されます。
4. ruleset ファイルのサーバーパスを登録するには、**Server path** タブをクリックし、**Rules** パスを入力して **Save** をクリックします。
サーバーパスを登録すると、MTA サーバーは常に最新バージョンの ruleset ファイルを使用します。

Custom rules リストにはルールが表示されます。

3.7. グローバルカスタムラベルの追加

MTA には、全プロジェクトに適用される事前設定されたグローバルラベルのセットが含まれています。

独自のカスタムグローバルラベルを定義できます。

手順

1. Web コンソールで、**Labels configuration** をクリックします。
2. **Add label** をクリックします。
3. labelset ファイルをアップロードするには、**Upload** タブをクリックし、**Browse** をクリックして、1つ以上のファイルを選択してから **Close** をクリックします。
labelset ファイルには、**.mta.label.xml** または **.windup.label.xml** 拡張子が必要です。アップロードしたファイルは MTA サーバーに保存されます。
4. labelset ファイルのサーバーパスを登録するには、**Server path** タブをクリックし、**Labels** パスを入力して **Save** をクリックします。
サーバーパスを登録すると、MTA サーバーは常に最新バージョンの labelset ファイルを使用するようになります。

Custom labels リストには、ラベルが表示されます。

第4章 WEB コンソールの認証設定

認証が必要なように Web コンソールを設定できます。これは Red Hat Single Sign-On によって処理されます。有効にする場合は、Web コンソールへのアクセスが付与される前にユーザーを認証する必要があります。

Web コンソールの認証を設定するには、以下の手順を実行することが推奨されます。

1. Web コンソールの認証を有効にします。



注記

OpenShift に Web コンソールをインストールしている場合、認証はすでに有効にされており、無効にすることはできません。

2. 管理ユーザーの認証情報を変更します。
3. デフォルトの Web コンソールユーザーを削除します。
4. Web コンソールユーザーを追加します。

4.1. WEB コンソールの認証の有効化



注記

OpenShift に Web コンソールをインストールしている場合、認証はすでに有効にされており、無効にすることはできません。

以下のスクリプトを実行して、ユーザーが Web コンソールにアクセスする前にログインする必要があります。このスクリプトは、ユーザーが Web コンソールへのアクセスを付与する前に認証を要求するように Red Hat Single Sign-On ログインページを設定します。

```
$ <MTA_HOME>/switch_to_authentication_required.sh
```



注記

Windows 環境では、**switch_to_authentication_required.bat** スクリプトを使用します。

今回のリリースにより、Web コンソールを起動するたびに、Web コンソールにアクセスするためにユーザーが認証される必要があります。

4.2. 管理ユーザーの認証情報の変更

Web コンソールの認証を有効にすると、ユーザー名 **admin** およびパスワードの **password** でデフォルトの管理ユーザーが提供されます。Web コンソールユーザーには、承認されたパスワードのみがさらに変更できるように、このパスワードを変更する必要があります。

デフォルトの管理ユーザーのパスワードを変更するには、以下の手順に従います。

1. Web コンソールが実行していることを確認します。

2. Red Hat Single Sign-On 管理コンソールを開きます。

- **a.zip** インストールの場合 :

a. ブラウザーで **http://localhost:8080/auth/** に移動します。

b. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。

- OpenShift インストールの場合:

a. ブラウザーで **<OPENSIFT_URL>/console/project/mta/overview** に移動します。



注記

デプロイ時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、**mta** をプロジェクトの名前に置き換えます。

b. **SSO HTTPS** アプリケーションのリンクをクリックし、URL の末尾に「/auth」を追加します。

c. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。

3. **admin** および **password** のデフォルト認証情報を使用してログインします。

4. 左上隅で、ドロップダウンリストから **Master** レルムを選択します。

5. 左側のナビゲーションメニューで **Users** を選択し、**View all users** をクリックします。

6. **admin** ユーザーの行から、**Edit** をクリックします。

7. **Credentials** タブを選択します。

8. **New Password** フィールドおよび **Password Confirmation** フィールドに新しいパスワードを入力します。

9. **Temporary** フィールドを **OFF** に変更すると、ユーザーは次回ログイン時にパスワードを変更しなくても済みます。

10. **Reset Password** をクリックしてから、ポップアップの **Change password** をクリックします。

このデフォルトの管理ユーザーを完全に削除し、独自の管理ユーザーを作成することもできます。ただし、デフォルトユーザーを削除する前に、新規ユーザーを追加してください。

4.3. デフォルトの WEB コンソールユーザーの削除

デフォルトの Web コンソールユーザーは、ユーザー名 **mta** およびパスワード **password** とともに Web コンソールが提供されます。Web コンソールの認証を有効にすると、このユーザーを削除し、認証されたユーザーのみが Web コンソールにアクセスできるようにする必要があります。

以下の手順に従って、デフォルトの Web コンソールユーザーを削除します。

1. Web コンソールが実行していることを確認します。

2. Red Hat Single Sign-On 管理コンソールを開きます。

- **a.zip** インストールの場合：
 - a. ブラウザーで **http://localhost:8080/auth/** に移動します。
 - b. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
- OpenShift インストールの場合:
 - a. ブラウザーで **<OPENSIFT_URL>/console/project/mta/overview** に移動します。



注記

デプロイ時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、**mta** をプロジェクトの名前に置き換えます。

- b. **SSO HTTPS** アプリケーションのリンクをクリックし、URL の末尾に「/auth」を追加します。
 - c. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
3. 管理ユーザーの認証情報を使用してログインします。デフォルトの認証情報は **admin** と **password** です。
 4. 左上隅で、ドロップダウンメニューから **mta** レルムを選択します。
 5. 左側のナビゲーションメニューから **Users** を選択し、**View all users** をクリックします。
 6. **mta** ユーザーの行から、**Delete** をクリックし、確認します。

4.4. WEB コンソールユーザーの追加

Web コンソールの認証が有効になっている場合は、管理者がユーザーを追加して、Web コンソールにアクセスできるようにする必要があります。

以下の手順に従って、新しい Web コンソールユーザーを追加します。

1. Web コンソールが実行していることを確認します。
2. Red Hat Single Sign-On 管理コンソールを開きます。
 - **a.zip** インストールの場合：
 - a. ブラウザーで **http://localhost:8080/auth/** に移動します。
 - b. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
 - OpenShift インストールの場合:
 - a. ブラウザーで **<OPENSIFT_URL>/console/project/mta/overview** に移動します。



注記

デプロイ時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、**mta** をプロジェクトの名前に置き換えます。

- b. **SSO HTTPS** アプリケーションのリンクをクリックし、URL の末尾に「/auth」を追加します。
 - c. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
3. 管理ユーザーの認証情報を使用してログインします。デフォルトの認証情報は **admin** と **password** です。
4. 左上隅で、ドロップダウンメニューから **mta** レルムを選択します。
5. 左側のナビゲーションメニューから **Users** を選択し、**Add user** をクリックします。
6. **Username**、**First Name**、**Last Name**、およびその他の必須フィールドに入力して、**Save** をクリックします。
7. ユーザーを追加したら、**Credentials** タブを選択します。
8. **New Password** と **Password Confirmation** フィールドに一時パスワードを入力し、**Temporary** フィールドを **ON** に設定したままにします。
9. **Reset Password** をクリックしてから、確認ポップアップで **Change password** をクリックします。

ユーザーはデフォルトで有効になっており、この一時パスワードを使用して Web コンソールにログインする際に新しいパスワードを設定する必要があります。

Revised on 2021-08-08 19:38:58 +1000